

明治期に長崎で導入された建築タイル

長崎市南山手・旧レスナー邸（杠葉病院別館）における調査

長崎大学 増田 研
兵庫県播磨町郷土資料館 深井明比古

Architectural Tiles in Nagasaki in the Meiji era A Brief Report of Preliminary Research at a Western Style Building

Ken Masuda (Nagasaki University)
Akihiko Fukai (Harima Municipal Local Museum)

概 要

長崎市南山手の旧レスナー邸は明治中期に建築された、長崎洋館群の一画をなす建物である。この建物の玄関部ポーチに敷かれたタイルについてはいくつかの文献において紹介されているが、その由来については不明なままであった。本稿はこの玄関部ポーチで用いられたタイルを詳細に記述し、長崎における洋館建築史への一助としたい。また、玄関ポーチのタイルについては損傷が著しく、保存や修復のためにもその現況を詳細に記していくことが必要である。

Abstract

“Sigmund Lessner’s House” is a western-style building constructed in the Meiji era (late 19 c). While its floor tiles used at the entrance porch were introduced in several publications, no details were mentioned. This is a brief report of our preliminary research conducted in February 2020 to record a detailed description. We found four types of ceramic tiles used, among which several types are made in Belgium and others are made in Japan. The made-in-Japan tiles are products of Awaji-seito factory of Awajishima (Hyogo prefecture) that are not well-known even among the study of industrial history of ceramic tiles. Our research also discovered the floor tiles are so damaged that an engineering assistance to preserve the historical heritage is recommended.

1. 長崎の洋風建築におけるタイル使用

日本において建築の内装および外装にタイルを用いるようになったのは明治以降のことであり、その生産と利用の拡大は近代の建築の変化に対応している。

長崎におけるタイルの古い利用例としては、史跡である料亭・花月の「春雨の間」床面に敷設された輸入敷瓦が知られる。生産地は不詳だが、オランダもしくは中国の生産であるとする説があり、港市長崎の文化交流空間としての特色をよく表している。このタイルは国内に現存する輸入タイルとして最古級のものとされる（阿木ほか1991：86）。

明治以降の輸入タイルとしては、グラバー邸、オルト邸、ウォーカー邸などのヨーロッパ人貿易商の邸宅として建てられた、いわゆる洋館において用いられているほか、三菱長崎造船所の施設である占勝閣にも確認される。これらのタイルの由来も確認が難しいが、多くがイギリス製の「ヴィクトリアン・タイル」であろうと推測される。

日本製タイルの利用については、三菱高島炭坑の事務所である洋館「炭坑舎」（長崎市小曾根）の例がある。これは1901年（明治34年）に建てられた木造二階建ての建築で、一階のベランダ床面には、有田の松尾徳助氏¹の窯で焼かれた磁器タイルが敷設されていた。炭坑舎は1985年に解体され現存しないが、タイルは数枚が高島石炭資料館（長崎市高島町）にて展示されている。

本稿で取り上げるのはグラバー園にほど近い長崎市南山手に所在する「旧レスナー邸」で使用されているタイルである。この洋館の玄関ポーチおよび内装にタイルが多数使用されていることはすでに紹介されていたが（INAX 1985）、その製造元などについては明らかにされていなかった。

2. 旧レスナー邸（杠葉病院別館）

ジクムント・レスナー（Sigmund Lessner）は1859年1月13日にルーマニアのブコヴィナに生まれ、1920年2月24日に長崎で没した商人である。父レブ・レスナーはオーストリア国籍、母ハンナはロシア国籍をもつ、いずれもユダヤ人である。一家は1880年代初期に

¹ 松尾徳助（1847-1926）は有田・岩谷川内の職人で、有田で最初に石炭窯を導入した人物だとされる。明治末に180mm角程の磁器タイルの生産を始めたが、これは湿式成型された瀬戸の本業敷瓦（タイル）によく似て、白地にコバルト青で模様が転写されている。

長崎に渡航した (Burke-Gaffney 2009 : 198)。ジクムントは1884年に梅香崎に雑貨商を開いて以来、景気に左右されながらも小売、卸売、競売などを手広く手がけただけでなく、長崎在住のユダヤ人コミュニティーのリーダーとして活躍し、1901年に設立された長崎ユダヤ人協会の会長も務めた。坂本国際墓地の一角にあるユダヤ人墓地の開設にも尽力し、レスナー家の人々も多くがそこに埋葬されている。

レスナーは明治中期に南山手や浪の平といった外国人居留地にいくつかの不動産を取得したとされるが、そのひとつが本研究でとりあげる旧レスナー邸 (長崎市南山手町) である²。木造2階建ての洋風建築であるが、設計者は不明であり、建築時期についても明治16~35年の間とされるなど、不詳な点が多い (山口1967 : 158)。レスナーの死後、邸宅は売却され英国領事館の官舎となったが、大正14年 (1925年) からは紅葉病院の別館として使用されてきた (山縣2002 : 224)。現在は紅葉病院を傘下に持つ社会福祉法人緑葉会の本部事務所として利用されている (図1)。

3. 旧レスナー邸におけるタイルの使用状況

筆者らは2020年2月20日と21日の2日間にわたり、緑葉会の協力を得てタイルの使用状況ならびに保存状態を調査した。この建築のタイルについては、1985年に刊行された文献に写真入りで紹介があり (INAX 1985)、玄関ポーチにおいて多彩施釉のマジョリカタイルが使用されていることは知られていた。

建物内部では (A) 2階トイレ部分の床および壁面、(B) 1階廊下奥の床面、(C) 暖炉マントルピースの3箇所タイルの使用を確認した。室内のタイルについては、本研究の主たる調査対象ではなかったため種類と分布、使用状況の確認に留めた³。いずれも保存状態は良好であった。

(A) 2階トイレ部分は、かつては風呂場として利用されていたという。ここでは、床に象嵌タイル、壁に日本製のタイルを確認した。日本製タイルは床面および壁面に敷設されているが、壁面には割れているものが張られており、以前に敷設されていた箇所からの再利用であると考えられる。その多くが愛知県の瀬戸で製造された湿式成形タイル (本業

² かつての地番は南山手15番である。

³ 本稿のもととなった2020年2月の調査は玄関ポーチ部のタイルの記録を目的としていたため、建築内部のタイルについては詳細な調査を行っていない。そのため、ここでは写真を掲載せず、文章で紹介するに留める。

敷瓦)と考えられ、サイズや文様の異なる複数の種類が用いられていた。これらは明治時代から昭和初期にかけて多く生産されたもので、日本各地で使用例が見られるものである。

日本製タイルとしてはほかに、有田で焼かれた磁器タイルを確認することができる。これは上述の三菱高島炭坑事務所「炭坑舎」ベランダで用いられていたものと同じである。この場所での日本製タイルは、異なる種類のものがあまり統一的ではないかたちで敷設されていることから、建設当初のものではないことが示唆される。

2階トイレ部分の床にはほかに、一辺約14センチの象嵌タイルが敷き詰められていたが、これは後述する保管タイルの調査によってベルギー製であることが判明した。4枚組のタイルが整然と敷設されていることから、建設当初からこの象嵌タイルが床に敷き詰められていた可能性がある。

(B) 1階廊下奥では日本製とヨーロッパ製のタイルが混在して用いられているのを確認した。日本製は4枚組の多彩施釉チューブライニングタイルであり、後述する玄関ポーチ部の調査結果より、兵庫県の淡路製陶(株)の製品であると考えられる。ヨーロッパ製のものにはベルギーのジロー社(Gillot & Cie Hemiskem)の象嵌タイル(カタログ番号409番)など、数種類の象嵌タイルが見られたほか、製造国やメーカー不明ながらヨーロッパ製と推測される多彩施釉のレリーフタイルも数種類確認された。

(C) 一階の暖炉マントルピースでは多彩施釉レリーフ、単色施釉、無釉モザイク、象嵌タイルなどを確認した。一部に日本製が使われている可能性はあるものの、多くはヨーロッパ製だと考えられる。

4. 屋外における保管タイル

旧レスナー邸敷地内では、ケース2つに使用歴のあるタイルが保管されており、これについても枚数などの記録を行った(図2, 3, 4)。すべてをケースから取り出して水とブラシで簡易に洗浄し、種類ごとに仕分けしたうえで、写真撮影と裏型の拓本を実施した。

保管されていたタイルは4種類あり、欠片も含めて総数154点であった。このうち3種類はベルギー製で、屋内床面にも同じ種類のものが用いられていた。これらの保管タイルは過去のいずれかの時点で改修や改築の際に床面から取り外されたものだと推測されるが、屋内のどこで、どのように用いられていたかは不明である。

図5、図6、図7は保管タイルに含まれていたベルギー製のタイルである。いずれもベ

ルギーのアントワープに近い都市ヘミクセム（Hemiksem）に所在したタイルメーカーであるジロー社（Manufactures Céramiques d’Hemixem, Gillot & Cie）の象嵌タイルであり、1904年から1929年まで製造されていた⁴。保管された合計129枚のほか、十数枚が館内で敷台として再利用されている。これらをすべて敷き詰めるとおよそ畳2枚ほどの広さになることから、かつては建物のどこかで床面にまとめて敷設されていたものだと考えられる。また、保管されていたもののなかには、サイズ調整のために整形されているものも含まれている。上述した2階トイレ部分の床面（A）にも同じデザインのタイルを確認することができるため、かつて風呂場として利用されていた場所の床面から、改築の過程で取り除かれた可能性がある。

図8は日本製の陶器タイルで、瀬戸で湿式成型された、いわゆる「本業敷瓦」である。一辺が20センチ近い大型のタイルで、表面には銅板転写によるマンガン着色がなされている。これも裏面にモルタルが付着しており、どこかで使用されていたものが撤去されたのであろう。剥がす際に割れたのか、完全な状態のものはひとつもなく、保管されていたものはすべて欠片となった25点である。

5. 玄関ポーチ

玄関ポーチは建物の北側にあり、およそ2m×3mの範囲に4種類のタイルが敷設されている。多くのタイルが破損しており、すでに欠損している部分にはモルタルが充填されている。モルタルで塞いである部分にかつてあったものも含めて、4種類のタイル、計170枚が用いられていたと考えられる（図9、図10）。本研究ではまず、これら4種類の配置と損傷程度を記録するとともに、その製造元を明らかにすることを目的とした。

タイルの製造元や製造時期を割り出すには裏型の確認が欠かせない。玄関ポーチの周囲には破損したタイルの欠片が散在するほか、一部のタイルは剥離しているため裏型を確認することができた。

使用されているタイルは6インチ角（およそ150ミリ角）の八角形タイルが2種類、正方形タイルが2種類である。八角形タイルについては、茶色と白色の2種類があり、もともとは茶色が44枚、白色が8枚配置されていたと考えられる。この八角形タイルについて

⁴ ベルギー、ヘント大学（Ghent University）のマリオ・ベック（Mario Baeck）博士より御教示いただいた。

は、散在していたタイル片をつなぎ合わせて確認したところ、イギリスのミントン製であることが明らかとなった（図11）。

正方形タイルはいずれも多彩施釉のチューブライニングタイルで、乾式成型の硬質陶器タイルである。これらは緑色をした草花文タイル（102枚）と青色をした4枚組幾何文タイル（4組、計16枚）で、裏型を確認した結果、いずれも日本製であることが判明した。旧レスナー邸で用いられていたものは、その裏型に漢字の「白」がデザインされていることを根拠として、「淡路製陶」の製品であると判断した（図12）。

淡路製陶は兵庫県、淡路島の中心地である洲本町に所在したタイルメーカーである。これは現在まで続く淡陶(株)(現・Danto Tile)の源流にあたる珉平焼の開祖、賀集珉平の高弟であった田村久平・福平の兄弟が開いた窯であり、淡陶と淡路製陶はいわば兄弟分にあたる（INAX 1991：459）。ただし淡路製陶については詳しいことはほとんど何も伝わっておらず、カタログも現存しない。実際の使用例が発見されたのはこれが初めてである。

図13は淡路製陶製の多彩施釉草花文タイル（152×152×10mm）である。玄関ポーチに102枚使用されていたと考えられるこの草花文タイルは、ごく一部だけ残っているものも含めて77枚が現存しているが、完全な形で残っているものは1枚もない。裏型に見える「白」の刻印から、淡路製陶の製品であると判断した。同じデザインで色違いのものがINAX ライブミュージアム・世界のタイル博物館（愛知県常滑市）に所蔵されており、同じく淡路製陶の製品である。上述のように、淡路製陶の製品カタログは現存しないが、このデザインを同社が得意としていたことは間違いない。

図14は同じく淡路製陶製の4枚組多彩幾何文タイルである。これもまた、剥離しているものの裏型に「白」がデザインされた淡路製陶の刻印を確認できる（図15）。

玄関ポーチ部で使用されているタイルには、損傷が大きく、数年以内に粉々になって消失してしまう可能性の高いものが十数枚ある。1980年代に撮影された同じ玄関ポーチの写真と比べても、この30年ほどで損傷が進んだことが見てとれる（図16, 17）。

損傷の原因として考えられるのは、タイルの上を人が歩くことだが、より大きな影響を与えているのは床面（地面）の浮き上がりである。植物の根が地中に入り込んだために、基礎部分のコンクリートごと押しあげられているのであろう。そのため、タイルのなかには「剥離はしていないが、固定されていない」ものが多くみられ、こうしたものは、なんらかの衝撃ですぐに粉々になってしまう可能性がある。

6. まとめ

使用されているタイルの多くは明治から昭和初期（19世紀末から20世紀初頭）の製品であり、イギリスやベルギーなどのヨーロッパ製タイルと、淡路島の淡路製陶の製品、それに産地不明ながらも日本製のタイルが確認された。

保管されていた分も含めて、ヨーロッパ製の象嵌タイルが多く利用されていた。こうした象嵌タイルはグラバー園内の洋館や、三菱占勝閣などでも使用されており、長崎の洋館群の特徴であると言える。とくにベルギー製の象嵌タイルについては、日本での使用例が確認された例は管見のかぎり無い。横浜の山下居留地遺跡からの出土品には日本製のほかにドイツ製、フランス製、イギリス製のタイルが含まれているが、ベルギー製は見当たらない。（天野他 2010）

日本製タイルについては、現存数が少なく使用例も見当たらなかった淡路製陶のタイルが多数用いられていたことが確認された。この点からも、旧レスナー邸のタイルは日本のタイル工業史研究にとって貴重な財産だと言える。現在まで続くタイルメーカー淡陶（現：株式会社 Danto Tile）とは異なり、淡路製陶については情報が少なく、製品タイルがほとんど現存しないうえに、実際の使用例はおそらく今回が初めての発見である。旧レスナー邸において、製造から100年余りを経て現在でも使用に供されているのは驚くべきことであり、文化財としての価値は極めて高いと判断される。建築資材としてのタイル工業の歴史を解き明かすうえでも貴重な資料だと言えよう。

タイルの保存状態については、室内と屋外で明確に異なった。室内のタイルの保存状態は良好である。だが、玄関ポーチ部分のタイル、とくに日本製の硬質陶器タイルは損傷が著しく、保存や修復が困難になりつつある。旧レスナー邸の伝統的建築物としての価値を維持するためにも、なんらかの保存措置、あるいは修復措置が必要とされる。今後は、その方法の検討が必要である。

謝 辞

本調査の実施ならびに本稿の作成にあたり、社会福祉法人緑葉会、長崎市文化財課、マリオ・ベック博士（ヘント大学）、INAX ライブミュージアム・世界のタイル博物館より調査の便宜ならびに御教示をいただいた。謝して記す。

文 献

Burke-Gaffney, B.

2009 *Nagasaki: The British Experience, 1854-1945*. Global Oriental

INAX

1985 『ヴィクトリアンタイル：装飾芸術の花』 株式会社 INAX

1991 『日本のタイル工業史』 株式会社 INAX

阿木香・新見隆・日野永一・山本正之

1991 『日本タイル博物誌』 株式会社 INAX

天野賢一・宍戸信悟・近野正幸（編）

2010 『山下居留地遺跡』 かながわ考古学財団

山縣和夫編

2002 『日本の西洋館：風土に生きる明治の洋館』 官公庁図書出版協会

山口光臣

1967 『長崎の洋風建築』 長崎市教育委員会



図1 旧レスナー邸（現・社会福祉法人緑葉会）



図2 屋外の保管タイル



図3 保管タイルの洗浄作業



図4 洗浄後の乾燥と確認作業



図5
ベルギー Gillot& Cie 製の象嵌タイル
（カタログ番号 411）18点

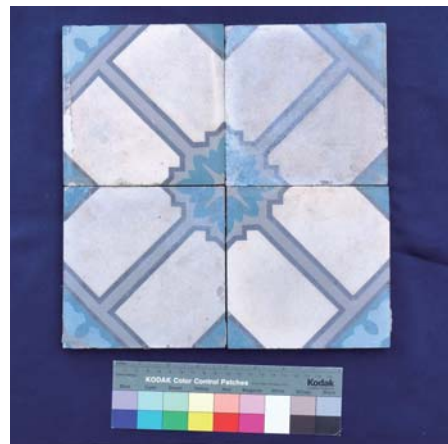


図6
ベルギー Gillot& Cie 製の象嵌タイル
（カタログ番号 407）16点



図7 ベルギー Gillot& Cie 製の象嵌タイル（カタログ番号 420）95 点



図8 日本製タイル。瀬戸の本業敷瓦で転写によるマンガン着色 25 点



図9 玄関ポーチのタイル。北側の玄関扉付近より撮影した。

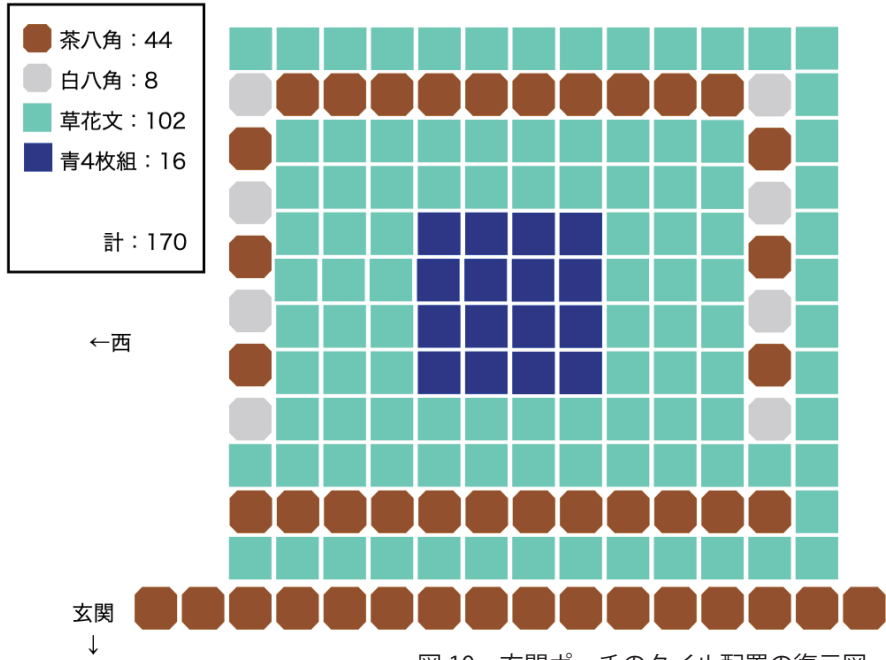


図 10 玄関ポーチのタイル配置の復元図



図 11 ミントンタイルの写真と裏型拓本

裏型には「MINTON HOL ■ INS & C PATENT TILE WORKS」の陽刻がある。

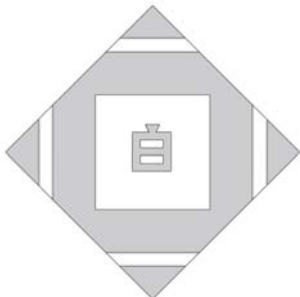


図 12：淡路製陶タイルの裏型

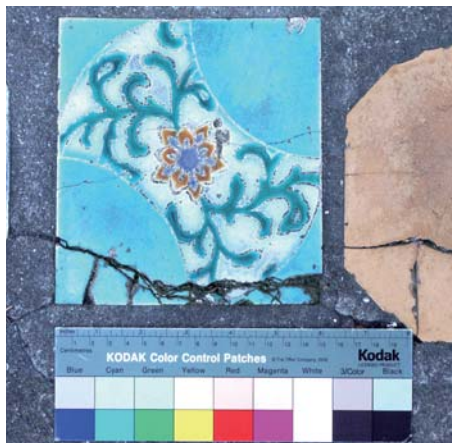


図 13
淡路製陶製の多彩施釉草花文タイル

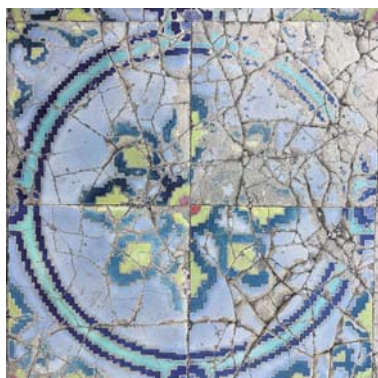


図 14
淡路製陶製の4枚組幾何文タイル



図 15 淡路製陶製の4枚組幾何文タイル。裏型に「白」のデザインが見える。



図 16: 玄関ポーチの一部を北側から撮影した。撮影者が手にしているのは1980年代に撮影された同一地点のもので、『ヴィクトリアンタイル：装飾芸術の花』（株式会社INAX、1985）に掲載されている。30年以上の時間経過のなかで明らかに損傷が進んだ。

